



通信

2017. 11. 15 Vol. 91 追補版

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: <http://svcf.jp>

10月26日発行のSVCF通信第91号は、第64回院内集会における菅野宗夫〈ふくしま再生の会〉副理事長の講演内容を掲載しないまま、一参加者の感想だけを掲載する等、編集上重大な不手際を犯しました。菅野副理事長から改めてお送りいただいた講演内容をもとに、前記の過ちを補う追補版を発行します。

福島原発行動隊 理事長 安藤博

第64回院内集会 認定NPO法人ふくしま再生の会副理事長 菅野宗夫氏講演

まず現地に集い、行動し、発信を



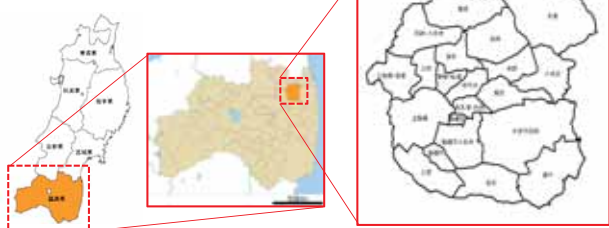
先日は院内集会(9/28)にお招きいただき、事故直後の村民の深刻な状況や全てが分断された中での避難生活、そして6年が過ぎ避難解除された飯舘村の現状を中心にお伝えしました。

この事故、全ての人(組織)が共感共有する問題でありまずは現地を見る事が大切。この事故の教訓を今後どう活かす。誰しもがいつ被害者になるかもしれない中で、被災者(被災地)の自立生活再生の為にみんなが協働する事が大事であることなどお話しさせていただきました。行動隊の皆さんに出会えた事に感謝いたします。

当日は、プロジェクターの不具合もあり満足にご理解いただけなかった方もいらしたと思いますので、発表資料および特に伝えたいことを本号に記載致します。



ようこそ！飯舘村へ

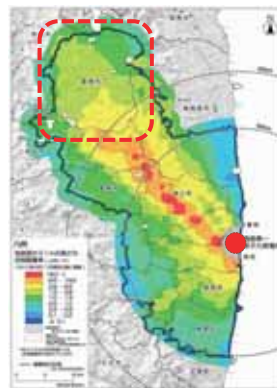


福島県の北部
阿武隈山系の北端に
位置する高冷地

20の行政区
東西15.2km×南北16.8km
面積230.1km²
74%が山林
平均標高 450m

2

東京電力福島第一原子力発電所との位置関係



東京電力
福島第一原子力発電所の
北西30km～50kmの
範囲に広がる。

原子力規制庁「避難指示区域にお
ける航空機モニタリングの測定結果につ
いて」平成 25 年 5 月 13 日
http://radioactivity.nsr.go.jp/ja/contents/8000/7480/24/362_0513_11.pdf

飯舘村の歴史、村づくり

20か村の小村が合併を繰り返す。

1942年(昭和17年)4月 大須村・新館村が合併して大館村が発足。
石橋村を飯舘村に編入。

1956年(昭和31年)9月 大館村と飯舘村が合併し、飯舘村誕生(今年60周年)。
2004年 南相馬市合併協議会から離脱。



「までいライフ」を提唱
ていねいに手間ひまかけた暮らし

自立した村づくり
小さな行政、小さな村づくり
村民一人ひとりが地域づくりの担い手として主
体的に参加する村づくり

←「日本で最も美しい村」連合に加入
<http://www.utsukushii-mura.jp/iitate-index>

四季折々 自然豊かな美しい村ー飯舘村



春



夏



秋



冬

大自然の恵みの中で生命を育む暮らし・産業



米作



畜産(飯舘牛)

高冷地のため、たびたび冷害に襲われてきた歴史
→多角化による経営の安定
ブランド牛(飯舘牛)
花卉栽培(トルコギキョウ、リンドウ)
高原野菜の栽培

循環型農業の実践



「山のこだわりや」の名刺

直販商品カタログ



手作り凍み豆腐の製造

安全な食品の生産 農業従事者の使命として

- ー自然農法による米作り
- ー畜産(飯舘牛)、野菜(高原野菜)、手作り豆腐
などの多角化
- ー消費者への直接販売

飯舘村の暮らしを形作ってきたコミュニティ



2010年7月



地区の共同作業
土木工事や植栽も
自分たちの手で

飯舘村の沿革

1956 (昭和31) 年9月30日	飯舘村発足
1961 (昭和36) 年4月25日	草野大火120棟焼失。罹災世帯46戸。罹災人員244人
1980 (昭和55) 年4月	飯舘村酪農研究同志会(若い農業者グループ)内閣総理大臣賞受賞
1980 (昭和55) 年7月～	低温と長雨で農作物に大被害
1987 (昭和62) 年1月	新春村民の集い(通称ホラ吹き大会)実施
1989 (平成元) 年8月5日	台風による集中豪雨被害甚大(20億円以上)
1989 (平成元) 年9月	「若妻の翼」
1990 (平成2) 年4月～	やまびこ運動着手(各地区創意工夫1,000万円ソフト事業)
1995 (平成7) 年4月	畜産技術センターがオープン
2005 (平成17) 年3月	県内初とぶろく特区認定
2006 (平成18) 年9月	立村50周年
2011 (平成23) 年3月11日 午後2時46分	東北地方太平洋沖地震発生

自然の恵み



飯舘村佐須の虎捕山山頂付近
からの初日の出(2016年1月)



飯舘村あいの沢「村民の森」



ハウスで育つ野菜



我が家に咲くフクジュソウ

自然の脅威 (2015年9月の水害)



水流でえぐられた道路
(我が家の前)



橋にひっかかった流木
(我が家の前)

試験栽培田に流れ込んだ土砂

えぐられて通行不能の道路

2011年3月11日14時46分

地震と津波



2011年3月12日河北新報

原子力発電所事故



2011年3月13日河北新報



2011年3月16日福島民報

事故後の経緯(1)

2011年

- 3月11日 21:23 福島第1原発の半径3km以内避難指示、3km～10km屋内退避指示(国)。【飯舘村】ライフライン断絶
- 3月12日 【飯舘村】原発周辺市町村から避難者受入(最終的に1,500人以上)
 - 5:44 避難区域3kmから10kmに拡大
 - 15:36 1号機水素爆発し建屋大破
 - 18:25 避難指示区域20kmに拡大
- 3月13日 【飯舘村】電気水道など一部復旧
- 3月14日 11:01 3号機建屋水素爆発
- 3月15日 6:14 4号機建屋水素爆発。
 - 11:08 30km圏内を屋内退避指定
- 12時頃 【飯舘村】放射線量急上昇
- 18時頃 【飯舘村】毎時44.7マイクロシーベルト記録
 - 【飯舘村】電話回線一部復旧。携帯電話回線復旧



2011年3月14日3号機建屋で水素爆発

事故後の経緯(2)【飯舘村】

- 3月16日 ガソリン不足深刻
- 3月18日 (菅野家) 子どもたちを神奈川に自主避難
- 3月19日 集団避難(栃木県鹿沼市へ509人)
自主避難合計3,700人
- 3月20日 原乳出荷自粛(牛乳ヨウ素5,200Bq/kg)
簡易水道摂取制限(水道水ヨウ素965Bq/kg)
- 3月22日 飲料水配布開始(村職員・自衛隊100トン。1人1日3リットル×8日分を各行政区の集会所に)



事故後の経緯(3)【飯舘村】

- 2011年
- 3月22日 スクリーニング検査1,330人
- ～3月23日 異常なし
- 3月25日 健康リスクアドバイザー講演会(いちばん館 約600人)
- 3月30日 IAEAが村内の土壌からIAEAが定める避難指示基準の2倍の放射性物質検出と発表



事故後の経緯(4)【飯舘村】

- 2011年
- 4月11日 政府が計画的避難区域を設定する方針を発表
飯舘村は、全村が計画的避難区域に指定されることが明らかに



事故後の経緯(5)【飯舘村】

- 2011年
- 4月22日 (正式に)計画的避難区域指定



事故後の経緯(6)【飯舘村】

2011年

5月15日 計画的避難に伴う第一陣離村



5月17日 特別養護老人ホーム含む9事業所の事業継続を承認(国)



事故後の経緯(7)【飯舘村】

2011年

5月～6月 避難生活開始

村を離れる村民の寄せ書き(比曽地区)

子どもはスクールバスで通学



事故後の経緯(8)【飯舘村】

2011年

5月31日 長泥観測点で積算放射線量年間20ミリシーベルト超と発表(国)



長泥十字路の掲示板に張り出された空間線量のメモ(2011年4月10日撮影)

6月1日 福島市飯野町に村役場飯野出張所開設

6月6日 村民による「いいいて全村見守り隊」防犯パトロール開始

事故後の経緯(9)【飯舘村】

2012年

7月17日 計画的避難区域の見直しにより、帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域に再編
飯舘村では、行政区別に3区域に再編



汚染されてしまった土壌



セシウム137による汚染状況

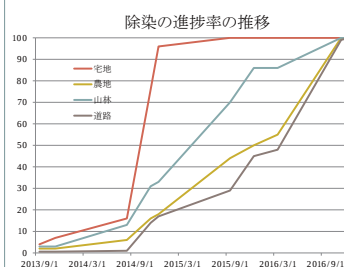
飯舘村の汚染はおよそ
30,000Bq/m² ～
1,000,000Bq/m² 超

セシウム137の各種分析結果(文科省による調査結果 2012年3月1日時点)
http://radioactivity.mext.go.jp/ja/contents/7000/6213/24/338_0912_18_rev0914.pdf

24

事故後の経緯(10)【飯舘村】

2014年～ 本格的な除染作業開始



除染対象に対する達成率であることに注意。
実際には、山林のほとんどは除染されていない。



農地の現実 優良農地は除染土壌の仮(々)置き場に



除染は復興のための手段であるはずだが、それが復興の妨げになりかねないという矛盾。

農地の現実

農地除染そして追加的地力回復工事へと



客土した農地は水はけが悪い

「美しい村」の現在は



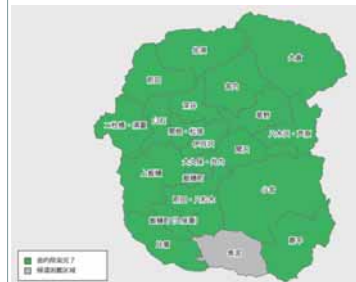
「日本で最も美しい村」に掲載されている飯館村の写真。



上の写真と同じ場所から撮影した現在の飯館村の写真。

美しい田んぼだった農地に除染土壌が積み上げられている。

除染の進捗率



平成28年12月31日時点

飯館村面積 230.1km²
除染対象面積 5,600ha (24%)
仮置き場 確保済み
同意取得 終了
面的除染 完了
避難指示解除 2019年3月31日

	実施数量
宅地	2,000件
農地	2,100ha
森林	1,500ha
道路	330ha

除染情報サイト(環境省) <http://josen.env.go.jp/area/details/iitate.html>

29

しかし除染は今も続いている

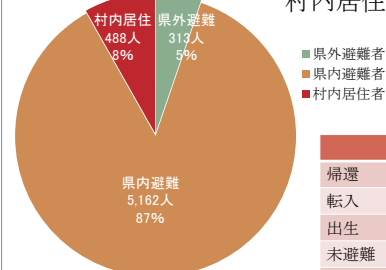


除染は手段。目的は安心して生活できるようにすることだから

30

平成29年9月1日現在の帰村状況

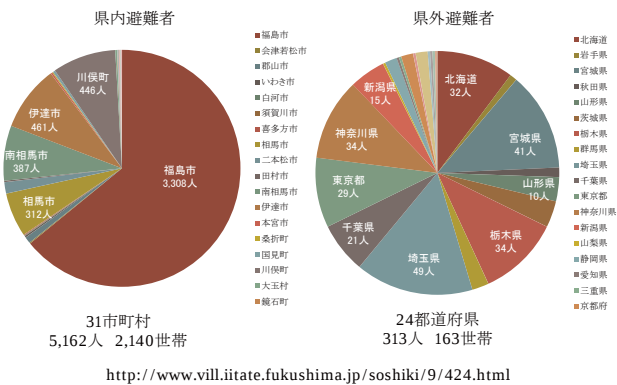
村内居住者は488人(8%)



	人数	世帯数
帰還	418	197
転入	27	16
出生	0	0
未避難	10	8
いいたてホーム	33	33
飯館村内	488	254

<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/soshiki/9/424.html>

平成29年9月1日現在の避難状況



事故後の経緯(11)【飯舘村】

2017年

3月31日 帰還困難区域を除き一斉解除



いいたてむら おかえりなさい式典

「広報いいたて」4月号

飯舘村の今は



いいたて までいな復興計画(第5版)



<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=1406>

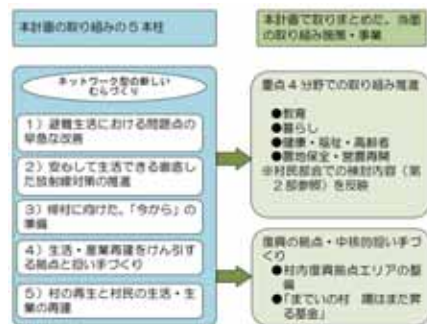
いいたて までいな復興計画(第5版)

ネットワーク型の新しいむらづくりのイメージ



いいたて までいな復興計画(第5版)

当面の取り組み施策・事業



村民による具体的な話し合いは、始まったばかり。

原発事故からの教訓

- 自然・生態系との共生……
- 生命(いのち)・生きることの大切さ……
- 自然災害と事故災害……
- 科学技術を何にどう活用する……
- 失ったものからの教訓……
- 何処の・誰の・どんな・どのような問題……
- みなさんが今やること・やれる事は……

次の世代・未来に何を継ぐ、伝える



虎捕山山頂の初日の出



初日を浴びる山津見神社本殿



再建された山津見神社拝殿

「ふくしま再生の会」のきっかけ



初めての訪問
「現地へ行けば何かできることが……」

2011年6月6日 田尾陽一氏のグループが福島県を視察。

- 福島第一原子力発電所の事故は、明確な人災
- 原子力発電技術が、事故を収束させる手段を持たないことのおかしさ
- 村民が帰村して安心して農業を営み生活できる施策を打つべき
- 福島だけではなく世界の問題
- 調査して得られたデータをすべて再生のために行政へ提供し提言を行う

被災現地で
被災者と協働して
継続的に

という点で一致。
自宅を開放して【ふくしま再生の会】がスタート。

再生のための各種調査・モニタリング



除染後の農地の調査



右上:比叡地区のいぐね(屋敷林)の調査
右中:土中のセシウムの移動調査
右下:村民による路上走行測定

着実に前進する試験栽培米 2016年



着実に前進する試験栽培米 稲刈りと全量全袋検査



2016年の稲刈り



2016年の全量全袋検査

2012年から毎年継続してきた米の試験栽培。
2014年からは毎年連続して、
福島県の「全量全袋検査」をパス(下限値25Bq/kgで「ND」)。
市場に流通させることはできないが、試食できるようになった。
ふくしま再生の会の会員で試食。

2017年避難指示解除 ようやく本格的な田植え



酒米栽培にチャレンジ(2年の実証を経て)



天候が心配だが、醸造～来春に新酒で

写真左:奥の田(黄色くなっている)に比べて実りが遅れている酒米

写真右:小林稔さんが避難中に作ったお米で醸造した「おこし酒」に負けない酒を

村民との協働による農業・畜産の再生



松塚地区住民との交流会

松塚地区・ふくしま再生の会・東京大学農学部との3者で協定を締結。
農業再生・畜産業再生のために協働。

水田放牧予定地での協働作業



環境省が除染しない田んぼの畦に、ビニールシートをかぶせ、来春の放牧後、牛が汚染された畦草を食べないようにする
この後この周辺に牧槽も設置した



GPS付放射線モニターを背負い、放牧予定地をくまなく歩いて線量測定

松塚地区の山田猛史さんが推進している水田放牧予定地では、猛史さんとふくしま再生の会のメンバーが協働して、着々と準備を進めている。

野菜のハウス栽培

養液点滴栽培によるレタスの収穫。
集約型のハウス栽培の取り組み。



手前(右)「宗夫ハウス」
奥(左)「明大ハウス」



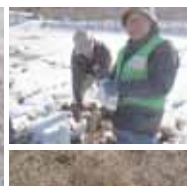
「宗夫ハウス」の
レタス栽培

(土壌を使用せず
軽石培地で
栽培)



「永徳ハウス」のトマト栽培

村民とともに土壌放射能測定



村内100か所(20行政区×各5か所)の田圃で
各地区の村民とふくしま再生の会のボランティアが協力し
1か所当たり5点から土壌サンプルを採取。

開始時期が遅れたため、雪が積もった田圃での作業となった地区もあった。

ボランティアが土壌サンプルを測定用容器に詰めかえて測定用サンプルを作成し、
東京大学の協力によって土壌の放射能を測定。
報告書を作成し、村民に報告した。

明大ハウス

「明大ハウス」では、除染後の土壌を使用した栽培(養液土耕栽培)を試みている。



(一方で)野生生物による被害

2017年の正月、試験栽培用ハウスのビニールが破られ、中のほうれん草に被害。人の住まない飯館村では、人を恐れない野生生物が増えている。帰還後の農業再生の課題の一つ。



再生可能エネルギーの試み



微小水力発電(ピコピコ)の実験



ピコピコで
「再生の灯」



いいたて電力による太陽光発電

いいたてを学びの場として 国内・海外のスタディツアー



留学生のスタディツアー

右上:米国の協力技術者の視察
右下:東京の測定ボランティアのバスツアー

避難中の方々の健康医療ケア



仮設住宅で定期的を実施してきた健康維持相談会に加えて、村内の地区公民館で村民が集って楽しく過ごす会を開催

活動の拠点「霊山センター」



霊山センターの外観



右上:留学生らのスタディツアー
右下:測定データの検討会

自宅を村内の拠点に



納屋をリフォームし、村内に活動拠点づくり
住居兼ふくしま再生の会事務所として利用可能に。
(2016年11月完成)

活動報告会「これから5年 飯館村村民の思い」
(東京 2016年10月23日)



150名(うち村民15名)が参加。
村民の声を中心に活発な議論が行われた。

報告会「6年間の協働測定結果報告会」
(飯館村 2017年8月26日)



活動報告の配布資料

飯館村の交流センターふれ愛館で開催された報告会には、村民、ふくしま再生の会の会員、村役場からも参加して、活発に質問・議論が行われた。

「ふくしま再生の会」の最新の活動紹介



ふくしま再生の会Webサイト
<http://www.fukushima-saisei.jp/>

ふくしま再生の会 Facebookページ
<https://www.facebook.com/FukushimaSaisei/>

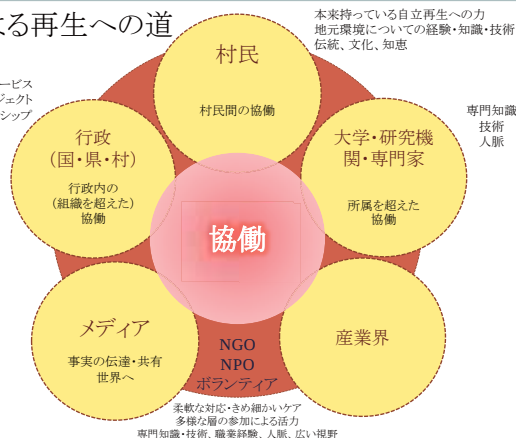
— 2017年 再生への一步を踏み出す —

ふくしま再生の会活動
営農再開に向けて大型ハウス建設・運営



協働による再生への道

基盤となる公共サービス
大規模なプロジェクト
ビジョンとリーダーシップ



夢大らかにー飯館村民歌

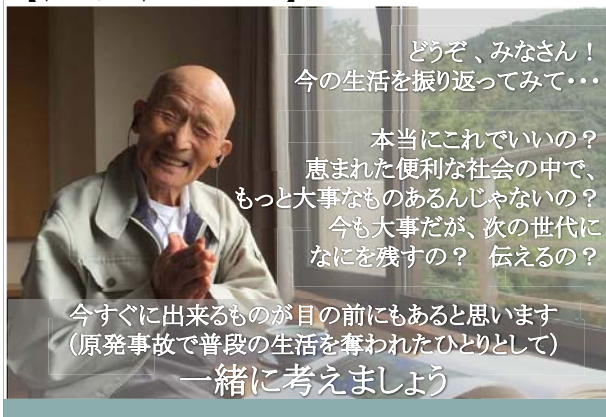
夢大らかに
(作詞 小林金次郎 作曲 石河 清)



山 美しく 水 清らかな
その名も飯館 わがふるさとよ
みどりの林に 小鳥は歌い
うらら春陽に さわらび萌える
あゝ われら 今こそ手と手 固くつなげて
村を興さん 村を興さん

土 よく肥えて 人 情ある
その名も飯館 わがふるさとよ
実りの稲田に 陽は照りはえて
続く阿武隈 山幸歌う
あゝ われら 夢大らかに ともに励みて
村を富まん 村を富まん

【終わりに伝えたいこと】



福島原発行動隊の皆さんによる院内集会にお招きいただき、このような出会いの場を作っていたことは私自身の大きな研鑽にもなりました。

現地の現状をできるだけ正しく伝え、共感協働することの大切さをお話しさせていただきましたが、掲載資料で伝わらない部分をここに記載致します。

福島第1原子力発電所事故直後の生々しい状況は、言葉では言い表しきれない混乱と、この世にない想像を絶する出来事の連続であった事。この気持ちわかりますか？と言いたいぐらいです。

普通に生きてきた(生活してきた)ものを一瞬に失い6年8ヶ月も続き、特に深刻なのは、心身ともに病弱な人や高齢者 子供達だと思います。父(94歳)は、「あつてはならないあの戦争より酷い」と心境を語り、又避難するにあたり「生きることは辛いことの連続だ。様々な災害をみんな乗り越えてきてるんだから 深刻に考えず頑張れ!」と。父から人としての人間としての勉めを教えられ勇気づけられました。

家族(7人)が分散しての避難生活続く一方で、生きる術を求め宮城県でお米などの栽培(今年で7年目)や、再生の道を見つけようと「ふくしま再生の会」(田尾理事長)の皆さん方と現地で協働して継続的に活動してます。又、自身今年は復興元年と位置づけ最先端技術ICT活用による

(野菜栽培)ハウス建設中です。失ったものの大きさを痛感しながら、マイナスからのスタートをいたしました。

村民自身も、課題は山積みだが生活再生に向けて(帰村・村外・二重拠点)、今できることに懸命に取り組んでいる。これが実態です。

「原発事故の収束」は2つあると思います。福島第1原子力発電所の事故現場の収束と被災者(被災地)の収束であり、何方も等しく大事です。「事故現場をいち早く安心できるものに」と「被災者がいち早く人間らしい生活再生する事」に職域を超えての対応が必須だと思います。

福島を事故を今後活かす為には、全ての人(行政 学者 組織産業界等)が垣根を越えて先ず現場(F1・被災地)に集い、今やるべき事や現地に必要な事を現地で行動し発信する。現地に来ないと見えないです。

科学技術に「絶対」はないと思います。起きてしまった事故にどう対応するのかが問われてます。自然災害の軽減に、又より暮らしやすい生き甲斐のある生活にする為に科学技術をどう活用すべきか寄与すべきか。次世代のことも視野に考えるべきだと思います。

まさに今出来ることを先送りせず協働して行動する事だと思います。福島を事故を今後活かしたいです。

被災地飯舘で皆さまをお待ちしてます。

今後ともよろしくお願い致します。

菅野宗夫